令和３年（2021 年）度　地域連携活動報告書

連携先名称：ふらの農業協同組合
協定締結日：2020 年 3 月 31 日
活動状況：継続中
連携先窓口：総務部企画課　課長井出紳也様、規格係高橋みのる様
活動資金：自治体予算　（JA 自主財源）
担当教員（所属）：中曽根勝重准教授・小塩海平教授（国際農業開発学科）/穂坂　賢教授（醸造科学科）/篠原卓准教授（国際食農科学科）/KIM Ok-Kyung キム・オッキョン助教（農学科）/後藤逸男名誉教授（全国土の会）/吉田綾子客員研究員（農芸化学科）
関連教員（所属）：真田篤史准教授・寺田順紀助教（国際農業開発学科）
活動体制（単位）：大学
活動目的：

包括連携協定における新たな枠組みの中で、東京農業大学と JA ふらのとの「ひと・もの・こと」の交流を実践する。以下、統括連携協定書に記載された相互に連携・協力項目（1～5）に、現在の具体的な活動目的を記す。

１．持続可能な農業の実現と地域経済の活性化に向けた連携

JA ふらの管内（北海道上川管内南部の上富良野町、中富良野町、富良野市、南富良野町、占冠村の 1 市 3 町 1 村を管轄）の農業・地域経済の活性を目指す。

（1）農産物・加工品に関する共同研究

・農産物・加工品の販売・提供

「JA ふらの」は、作物生産の他に加工品（カレー・ソース・ジュース・ポテトチップス等）数多く手がけている。「JA ふらの」を知ってもらうツールとして農産物・加工品を委託販売する。

（2）「JA ふらのブランド」となる特産品の開発

・JA ふらのブランドの日本酒づくりに取り組む。

2.農業・関連産業の人材育成
3.農大生の実習・研修環境の構築及び就農・就職支援

2.3 を包括した内容として、下記の活動目標（内容）を推進していく。

（1）農業研修「農業者を育てる」

・「JA ふらの」は、農業ヘルパー制度を運用しており、充実した宿泊施設と農家での作業請負等の実績がある。施設・仕組みを一部利用した新たな農業研修制度の在り方を模索する。

4.産地課題の解決と教員・学生の調査研究の受入れ

（1）ふらの型輪作体系の確立（中曽根准教授）

・JA ふらの管内では、タマネギ・小麦等の露地畑、メロン・アスパラ等の施設園芸と複数の農産物を扱う農家が比較的多い。また、「離農→周辺農家の規模拡大→作付体系の変化」などが見られ、営農条件は数年単位で変化している。これらの状況を経営面から評価し、ふらの型輪作体系の現状、最適化を提案する。

（2）JA ふらのブランドの日本酒づくり（穂坂教授）

・地域の自然を日本酒づくりに活かす「テロワール」の考え方を提案する。

・日本酒原料（酒米、水）の選定等へアドバイスを行う。

5.交流人口の拡大による地域発展

上記、1～4 を通じて、東京農業大学を軸に「「ひと・もの・こと」の交流から交流人口の拡大に発展することを期待する。

活動内容・成果：

東京農業大学・JA ふらの統括連携協定の活動は、2021 年度の活動計画書に示した①農産物・加工品に関する共同研究、②産地課題の解決、において各活動を担当する実務者での協議により単年度での活動および事業を行った。

【農産物・加工品に関する共同研究】

① JA ふらの管内で生産・製造される農作物・農産加工品を紹介（販売）

活動内容：定期的に「JA ふらの」から商品を仕入れて販売を実施（農大サポート）

販売実績は 2021 年 10 月～2022 年 4 月で 22 万円（税込）程度

取扱商品：定期的に販売している商品

スープカレー（ホタテ・ポーク）、パスタソース、にんじんジュース、ポタージュスープ、ミルクジャム、ふらのソース

季節的に販売している商品

ふらのメロン、小玉スイカ

取引方法：商品買取りによる販売

販売場所：代田キャンパス、世田谷キャンパス、農大一高、グリーアカデミー、オホークキャンパス、各部門イベント（入学式・卒業式・父母会など）

農産物（メロン等）の取扱の可能性：

農産物を代田キャンパスで季節的に取り扱うことは可能であるが、販売個数が限られている。基本は土日が来場者あり、代田キャンパスだと、2 階のセミナールームで、ふらのに係る農業の講座、セミナーを実施する。その時に、代田キャンパス前の広場でふらのフェアを実施とかしないと販売数の増加は見込めない。

また、学内であれば教職員に対して予約販売は可能であるが、農大サポートのメンバ

ーだけで実施するのは人数に限界があるので難しい。学生とのコラボレーション事業を展開できれば、学内の予約販売の可能性も考えられる。

　さらに、大学内で実施するイベントと合わせて、ふらのフェアが実施できれば農産物の販売数は増えると考えられる。

今後の課題：

農産物の取り扱いに関して、果実の熟度を十分に注して購入者へ届ける必要があるため、JA ふらのとの連携を再度確認して青果の取引を行う必要がある。

また、連携協定に基づく取引として、商品を取り扱う際の支払いシステムの見直しや商品紹介・販売に関する認知度の浸透を改善する必要がある。

②　「JA ふらのブランドの日本酒づくり」

活動概況：富良野地域の花からの酵母の分離と分離酵母の清酒醸造への利用の検討
　　清酒環境調査、花の採取および清酒醸造についての意見交換

日　時：2021 年 6 月 22 日から 6 月 24 日

場　所：JA ふらのおよび富良野地域（富良野市、上富良野町等）

活動者：穂坂賢、佐藤孝博（JA ふらの　企画課長）、杉山（吉田）綾子、村田定太郎（醸造科学科 4 年）

概　要：JA ふらの管内の清酒製造資源（米、水）の環境調査、酵母の分離源（花の採取）および清酒醸造についての行動計画等の意見交換を実施した。

＜活動内容＞

6 月 22 日（火）

13:00～13:30　訪問先：JA ふらの、植崎組合長
　　表敬訪問と花の採取についての協力願い

6 月 22 日（火）

13:40～14:00　訪問先：富良野市役所　富良野市経済部　川上勝義経済部長
　　趣旨説明と花の採取についての協力願い

14:00～17:00　JA ふらの管内の地域の花の採取と水源水質確認

6 月 23 日（水）

09:00～09:30　訪問先：JA ふらのにて花採取場所等の打ち合わせ

10:00～16:30　花の採取（ラベンダーおよびふらのに多く咲いている花の採取）

6 月 24 日（木）　帰京

＜進捗状況＞

採取した花 30 試料から、清酒醸造に利用できうる有用酵母の分離を試み、ラベンダーの

花から有用な酵母 4 株の分離ができた。
令和 4 年度に向け、分離株の特性を検討している。

＜今後の予定＞
令和 4 年度中に、有用株の清酒醸造への利用についての醸造学的特性の検討を行い、実地醸造ができるよう試験を継続する。

【農業研修「農業者を育てる」】
活動内容：学生の農業ヘルパー参加
活動時期：2021 年 8 月 1 日（日）から 9 月 10 日（金）
活動者：福崎南（国際農業開発学科）、越智ひなの（国際農業開発学科）
活動内容概要：
ジャガイモの収穫作業、トウモロコシの収穫作業、スイカの収穫作業、カボチャの収穫作業、ハウスの片づけ、農産物選別工場での箱詰め作業、ニンニクの選別作業、ニンニク加工工場での作業
参加学生の感想：
コロナ禍の影響により、正規の農業実習では、活動に制限が与えられ、農作業の経験は限定的なものであった。そのため、より多くの農業に関わる作業の経験を研鑽できる「農業ヘルパー」への参加は、大変有意義な機会を得ることができた。
また、北海道の広大な土地で行われる大規模な農業活動を経験したことで、現場の人々の苦労や努力を知ることができたと同時に、これからの日本の農業について考えさせられる良い機会になった。

【産地課題の解決】

① ふらの型輪作体系の確立

② たい肥センターの製造法改善

上記 2 点の課題に関しては、繰り返された新型コロナウィルス感染拡大に対する「緊急事態宣言」および「まん延防止対策措置」の発令の影響により、現地訪問が難しく、実質的な活動は行われなかった。

課題・改善点：

2021 年度も、2021 年度同様、新型コロナウイルス感染拡大に対する「緊急事態宣言」および「まん延防止対策措置」の発令により、様々な活動に制限が儲けられた 1 年であった。

2022 年度は、2012 年度に活動ができなかった「産地課題の解決」の活動について、各実務者による協議を進め、具体的な活動を展開する必要がある。

2022 年度は、東京農業大学の授業方針が「原則として通常授業の実施」に移行したため、農業研修「農業者を育てる」の活動についても、積極的に取り組めるよう協議を進めたい。